奪取

真保裕

奪取

真保裕一 Yuichi Shimpo

東京中日スポーツ（'94・11・7～'95・8・2）、北日本新聞、岐阜新聞、中国新聞、新日本海新聞、苫小牧民報、デーリー東北新聞他に掲載した『夢の工房』を改題し、加筆訂正したものです。

奪取（だつしゅ）

一九九六年八月二十日　第一刷発行
一九九六年九月十三日　第二刷発行

著　者　真保裕一（しんぽゆういち）
発行者　野間佐和子
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一／郵便番号　一一二―〇一
電　話　（〇三）五三九五―三五〇五（編集部）
（〇三）五三九五―三六一二（販売部）
（〇三）五三九五―三六一五（製作部）

印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　黒柳製本株式会社

定価はカバーに表示してあります。
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第二出版部あてにお願いいたします。本書の無断複写（コピー）は著作権法上の例外を除き、禁じられています。
© Yuichi Shimpo 1996 Printed in Japan

ISBN4-06-208282-9　（文2）

目次

プロローグ　5
第一部　手塚道郎篇　7
インターミッション1　186
第二部　保坂仁史篇　188
インターミッション2　339
第三部　鶴見良輔篇　344
エピローグ　522

装画／山野辺進
装幀／辰巳四郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

奪取

プロローグ

試しに財布の中から、五千円札と千円札を取り出してみてほしい。そして、あらためてとくとご覧いただきたい。

どういう好対照か、新渡戸稲造は白いネクタイで、その反対に、夏目漱石は黒いネクタイを締めている。もしかすると聖徳太子と伊藤博文から切り替わった時に、少しは話題となったのかもしれないが、そんなこと、おれは今までちっとも気づかなかった。

これは、新渡戸稲造のほうが、養女の結婚披露宴の際に写した記念写真をモデルにして肖像画が描かれ、夏目漱石のほうは、明治天皇が崩御したのを悼んで黒ネクタイを締めていた時の写真を参考にしたからである。どちらも旧札の聖徳太子や伊藤博文と比べると、格段と肖像画の占める面積が大きくなっている。

人の目は、他人の顔の変化に敏感だ。毎日見慣れた顔となると、一目見ただけで体調や機嫌の善し悪しまで分かることだってある。お札の肖像画も同様で、その表情に少しでも変化があれば――つまり偽札であれば、すぐに分かるようにと、旧札にも増して、より細密線で陰影深く描かれるようになったのである。つまり、ネクタイの色までの描き分けも、肖像画が大型化した影響の表れ、というわけなのだ。

次に、おれとは違い、いつも一万円札を持ち歩いている人は、それを取り出し、ながめてほしい。

実は現在ちまたに出回っている札には、二種類ある。

こっちのほうは、まだ話題になってからそう時間が経っていないので、記憶にある人も多いかもしれない。

判別部分は、二ヵ所ある。

まずは、福沢諭吉の肖像画の描かれた表のほうだ。左右両端の上の部分に、額面文字として「10000」の表示があるが、注目してほしいのは、そのすぐ下だ。額面文字と簡単な唐草模様の間に、何本かの横棒が描かれてい

る。その中に、縦二百五十ミクロンという小ささの「ＮＩＰＰＯＮ　ＧＩＮＫＯ」というマイクロ文字が発見できれば、それは平成五年十二月から出回り始めた新タイプのものだ。

同じマイクロ文字は、二羽のキジが描かれた裏面にもある。お札の一番下の、波形部分をご覧いただきたい。ちなみに、五千円札と千円札も同様で、すべて表と裏に一ヵ所ずつ、ご丁寧にマイクロ文字の入った新タイプが出回っている。それらの場所は――まあ、ここで説明するより、実際にルーペでご覧になって確かめてもらったほうがいいだろう。

ついでに、日焼け用の紫外線ランプを持っている肉体自慢派の方がいれば、自分の肌だけでなく、時にはお札の表面を照らしてみるのも面白い。あ～ら不思議。マイクロ文字の入ったお札は、浦安ディズニーランドで途中退場の際に手に押してくれるスタンプのように、赤い日銀総裁印が蛍光反応を示して、ぼうっとオレンジ色に浮かび上がるはずである。これが、もうひとつの判別箇所だ。いずれはすべての札が、この新タイプに切り替えられることになっている。

ほぼ毎日、一度ぐらいは手にしたり、ながめたりしているはずの紙幣だったが、おれは今までそんなことには気づきもしなかったし、詳しく知ろうとも思わなかった。

もちろん、知らなくても、日々の暮らしに不都合はない。たとえ知っていたとしても、飲み屋で多少の話題は取れるだろうが、それだけの話で、別に自分の懐具合に響いてくることはない。

ただ、何事にも例外は、ある。

その唯一の例外が、これから紙幣を刷ろうと決めた時、である。つまりは――偽札造りに着手しようという場合だ。

そんな志のある人たちは、多少は基礎知識として頭に入れておいたほうがいいだろう。経験者として、それだけは言わせてもらいたい。

おれが、そんな紙幣に関する雑学を知ることになったのは、すべては雅人がこしらえた借金のせいだった。それも、裏も表もどこから見ても暴力団の関係する、街金融から。その額、しめて一千二百六十万円。

それが、そもそもの、マネーゲームの始まりだった。

第一部　手塚道郎篇

1

その日もおれは、毎度のことではあるが、少々金に困っていた。だから、いつもの夜のバイトに出かけようとボロアパートの部屋を出た。

普段なら、自分の住まいの近くで仕事をしようとは考えないのだが、生憎とその日は、財布の中身がはてしなく空に近かった。そこで、とりあえずの電車賃稼ぎにと、アパートからそう離れていない裏通りにあった、缶ジュースの自動販売機に目をつけた。

時刻は深夜の十二時を回っていた。とはいえ、本来は近所ということで、より一層の警戒をするべきだった。が、とにかくおれは、早いところ当座の小銭を手にすることばかりに気を取られていた。そのせいで、背中がおろそかになっていたのだと思う。

ちょうど、自販機の投入口に手をかけようとしたところで、後ろから唐突に、ポン、と肩をたたかれたのだ。

「手塚道郎さんだね」

呼びかけられたこちらの腹にまで響くような、見事にドスの利いた低音だった。

おれは息を詰め、ずたぼろのショルダーバッグに差し入れていた右手を素早く抜き、振り返った。

目の前に、体も顔も異様にごつい男が、全身光り物を身につけ、塗り壁のように立っていた。

黒光りしたお決まりのサングラス。首には銀の鎖が見え、おれの肩に伸ばした手の袖口では金のブレスレットが揺れていた。腰にはバレンチノの金バックル。足元は今時珍しいエナメルの光沢に満ち、ついでに、後退しかった額までが街灯の明かりを反射し、てかてかと艶やかな光を放っていた。

「手塚道郎さんだね」

まぶしさに圧倒されてよく見えなかったが、光り物の背後には、黒スーツに身を包んだ痩せた男が立っていた。歳の頃は四十代の後半か。光り物の陰にいながら、それにも増して圧倒的な危ない雰囲気をかもし、立っていた。その男が、おれの名前を呼んだらしい。あまりに低い声を出すせいか、黒スーツは口の中で喉飴か何かをころころと転がし続けている。

絵に描いたように素性の分かりやすい二人を見て、おれは胸をなで下ろした。てっきり、お巡りだとばかり思ったからだ。

「お出かけのところ失礼ですが、その前にちょいと私どもとつき合っていただけませんでしょうかね」

黒スーツの言葉遣いは丁寧だったが、光り物の態度はこの上なく横柄だった。おれの肩をつかんだまま、威圧するようにごつい顔を近づけてきた。

おれは邪険に光り物の腕を振り払った。

「悪いけど、あと三分待ってくれる？　今、バイトの最中なんだ」

「小僧。兄貴が用がおありだと言ってるんだ。素直についてくりゃいいんだよ」

光り物が気色ばんで、丸太並みに太い腕を再びこちらに伸ばしてきた。

おれは二歩後退して、男の腕を軽くかわした。ショルダーバッグに素早く右手を入れ、中からスタンガン――高圧電流銃を取り出した。それを、二人の前に振りかざしながら言った。

「これ、何だか分かります？」

さすがに、男たちは危険物の取り扱いに慣れているようだった。一瞬のうちに頬から目元へと緊張が走り、表情が乾いたばかりのセメントみたいに強張った。

「念のために断っておくけど、これ、中のバッテリーとコンデンサーをパワーアップして、出力を五倍に高めてあるんだ。下手をすると、直接、心臓にくるんじゃないかな」

「小僧、てめえ――」

光り物がわなわなと体を震わせた。黒スーツがひきつったような笑みを片頬に浮かべ、低い声を押し出した。

「あんた、そんなものちらつかせると、あとで冗談じゃすまなくなるぞ。分かってんだろうな、おい」

つけ焼刃と見られた丁寧な言葉遣いを忘れ、黒スーツは本性むき出しに息巻いた。

おれはにこやかに、手にしたスタンガンを左右に振った。

「誤解だって、誤解。これはバイトのための道具なん

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

だ。三分待って、と言っただろ？」
いぶかしげに眉をひそめる二人を前に、おれは自動販売機に向かった。コイン投入口の金属部分に、スタンガンの先端をくっつける。
スイッチ、オン！
ハイパワー二十五万ボルトの電圧がはじけ、青白いスパークが一瞬上がった。
おれのにらんだ通り、この自販機は旧タイプのものだった。高周波をバイパスさせる非常回路も、保護シールドも作られていない。あっさりと、金額表示のデジタル盤が点灯し、最大容量の九百九十円を表示した。
おれはすかさず、釣り銭返却レバーをひねった。カチャリ、カチャリ、と九百九十円が返却口に落ちて来た。
「知ってました？」
振り返ると、光り物がぽかんと大口を開けていた。黒スーツが三白眼を丸くし、盛んにぱちくりさせている。
「自動販売機ってのは、マイコンでコインの識別とデータ管理を行ってるんだ。そのマイコンを制御するのが、電圧、なわけ。負荷がかかればハイ、なければロー。その二進法の組み合わせで、マイコンは動いてるんだ」
二人とも、数学の教師の前に立たされたできの悪い中学生みたいに身動きひとつしなかった。反応がない。
「ところが、ね、こういった古いタイプの自販機に組み込まれてるマイコンには、外部から高圧電流の負荷がかかった時に備えたバイパスやらシールド回路とかが作られていないんだよね。だから、スタンガンの作り出す高圧電流によって、誤動作を起こしてしまう」
呆気にとられている二人に、おれはしたり顔で頷き、講釈を続けた。
「けど、逆にあんまり電圧が強すぎると、中のＣＰＵ自体が吹っ飛んでしまうことがあるんだな。それに、誤動作を起こさせるのに成功しても、今みたいに最大容量を表示してくれるとは限らない。最近は保護回路のついた新型も多くなってるし、このバイトも危険度のわりには、実入りが少なくなってるのが実状なんだ」
おれは返却口から当座の電車賃を確保し、男たちを振り返った。
「で、何でしたっけ？」
それで黒スーツは、ようやく我に返ったようだ。ヤクザとしての威厳を保つよう、慌ててしかめ面をこしらえると、空咳をひとつしてから言った。
「西嶋雅人は、あんたの友人だな」
おれはわざとらしく考え込み、自販機の前で腕を組み合わせた。

「と言えるかどうか……。知り合いなのは間違いないけど」
「やつは友人だと言っている」
「そりゃ光栄だ」
「ふざけてんのか、てめえは――」
光り物が一歩前に進み出た。黒スーツが横目でにらみ、制止する。
一人がすごんでみせ、もう一人が優しく話しかける。刑事とヤクザに決まってみられる、見事な役割分担だ。もっともおれは、まだ幸いにも刑事の世話になったことはなかったが。
黒スーツは、自分の肩についたほこりを払い、三白眼をつり上げ、おれを見据えた。
「とにかく、あんたの友人だと主張している西嶋雅人を、うちのほうで預からせてもらっている。我々はね、手塚さん、彼の依頼で、あんたを迎えに来たんですよ」
「おれを？　また、どうして」
「お友達がね、貸しつけ明細の保証人の欄に、あんたの名前を書き込んだんだ」
「誰が保証人だって？」
黒スーツは、ここぞとばかりに微笑んだ。
「いやいや、これはいけない。申し遅れました」
急に馬鹿丁寧な口調に戻って懐に右手を差し入れた。
「私ども、表向きにはこういった看板をかかげさせてもらっております」
表向き、を強調して言い、一枚の名刺を取り出した。
「いつでも手軽ににこにこクレジット
株式会社　東建ファイナンス
西池袋支店渉外部長　**江波和彰**」
ご丁寧に名刺の隅には、「再生紙を使用しております」との断り書きまで入っていた。ヤクザの経営する街金でも、資源の再利用を心がけるご時世らしい。
環境問題に取り組む企業の渉外部長は、剃ったように薄い眉を寄せて、おれを見つめた。
「あんたのお友達は、半年ほど前にうちで融資した金を、いっこうに返済してくれないんですよ。それで仕方なく、保証人であるあなたともども、今後の返済予定について、お話をうかがわせていただこうと考えた次第です。ご面倒でしょうが、ご足労願えますね」
ずい、と二人の男たちが詰め寄って来た。
おれは、東京の星ひとつ見えない暗い夜空を見上げた。最近、雅人から連絡がないと思っていたが、なるほ

ど、こういうことだったのか。
雅人は一人っ子で、兄弟はなかったはずだ。頼るべき父親はとうに亡くしてるし、確か、母親はやつを放り出し、どこかの男のもとへ走ったのではなかったか。が、だからといって、よりによっておれの名前を保証人の欄に書き込むことはない。
もっとも、似たような境遇にあるおれも、いざという時には、あいつの名前を黙って拝借させてもらうだろうが。
「おい、聞いてんのか、小僧。兄貴がお呼びだと言ってるんだよ」
「断ったら、どうなります？」
あまり期待せずに訊いてみると、渉外部長が一歩引き、黒スーツの前をちらりと開いてみせた。
ベルトの脇に挟まれていたそれは、モデルガンにしては、あまりにもよくできすぎていた。
「こんな路上でこいつを使わせてもらいたくないもんだな。分かってるだろうが、スタンガンとは違い、こっちは多少離れていても威力は充分に発揮できる」
もちろん、そうは言ったが、まだ本物だと決まったわけではない。が、ここでそれを確かめるほどの度胸と無謀さは、おれも持ち合わせてはいなかった。
黒スーツの唇が、勝ち誇ったようにつり上がった。懐から喉飴の袋を取り出し、それをひとつ口の中に放り込むと、ころころと舌の上で転がしながら言った。
「ご一緒していただけないとなると、お友達の死亡記事を新聞で見ることになる。それではあんたとしても、寝覚めが悪いだろ？」
保険をかけられ、東京湾へドボンか。それともフィリピン辺りの海岸に打ち上げられることになるのだろうか。
「だからどうか、我々とご一緒してくださいな」

2

アパートからそう離れていない路地に、定番のメルセデスが違法駐車してあった。ブルーブラックの電動サンルーフつき３００Ｅ。渉外部長の身でこんな車を自由にできるのだから、にこにこクレジットの表稼業も、それなりの業績を上げているに違いない。
おとなしく二人に従い、メルセデスに乗り込もうとした時だった。
ふいに後ろから、光り物に腕をねじ上げられた。あまりの馬鹿力に肘の関節が悲鳴を上げ、おれはその場で

爪先立ちになった。
「おい、ちょっと、何すんだよ！」
黒スーツの渉外部長が無言のまま、否応なしにおれのショルダーバッグを探った。中から、スタンガンを取り出した。
「物騒なものは預からせてもらう」
「本当に預けるだけだからな。それには元手がかかってるんだ。あとで必ず返してくれよな」
おれの果敢な訴えかけにも、渉外部長は素知らぬ顔を決め込んだ。くい、と顎をしゃくり、それで光り物が腕を放してくれた。
「さっさと乗れ！」
背中をいやというほどはたかれ、おれはメルセデスの後部シートに押し込まれた。手をついた先で、黒革のシートが、キュッと鳴った。
「ほう。Sクラス並みの特注本革シートかよ。こっちもなかなか元手がかかってら」
感心して、シートの上でスプリングの具合を確かめようと体を揺すった。運転席に乗り込んだ光り物が、サングラスを外し、バックミラー越しににらみつけてきた。
「黙って座っとらんか、このガキ！」
「手塚さん、どうですか、軽く一杯。少しは緊張がほぐれますよ」
おれの冗舌を緊張からくるものと早とちりしたらしく、黒スーツが自慢げに言って、足元のクーラーボックスの蓋を開けた。中をのぞくと、輸入物の缶ビールが、ごろごろと各メーカー取りそろえて入っていた。
「じゃ、遠慮なく」
おれはギネスを手に取り、さりげなく缶を二、三度振った。横目で運転席の光り物の位置を確かめ、プルトップを引いた。
狙い通り、小さく飛び出た泡が、プシュリと光り物の横顔に命中した。
「あ、ごめん、ごめん」
「小僧、てめえ――」
「やめろ、佐竹。挑発に乗るんじゃない。いいから、さっさと車を出さんか」
上司に怒鳴りつけられ、光り物――いや、本名佐竹は、濡れた頬をひきつらせたまま、仕方なさそうにメルセデスを発進させた。
ギネスはきりりと冷えて、飲み心地は最高だった。
車は山手通りを経由して、西池袋で左に折れた。
ネオンきらびやかな裏通りに入ったところでスピードを落とすと、佐竹は辺りの路上を見回し、舌打ちをし

た。
「どうした。停めるところがないのか」
「いえ、大丈夫っス」
　ずらりと路上駐車の列が続く中、ちょうど一台分ほどのスペースが空いているのが見えた。が、生憎とそこは、白線で囲まれたパーキングメーターの前だった。
　驚いたことに、最近のヤクザは、パーキングメーターに料金を払っているようである。メルセデスを降りると、佐竹はすぐにチノパンのポケットを探り、中から小銭を取り出した。一応まともな稼業に就いているので、駐車違反とはいえ、そうちょくちょく法を犯してはいられないのかもしれない。
「ちょっと待った」
　おれはシートから滑り出ると、後ろから佐竹を呼び止めた。
「何だ、小僧」
「五百円玉、二枚、持ってるかな」
「そんなに長いこと駐車はせん」
「そうじゃなくて、こんなメーターに金を払うの癪じゃない」
「小僧、何考えてんだ」
　おれはしつこく佐竹の鼻先に右手を突きつけた。
「いいから、五百円玉を二枚出しなよ」
　佐竹はぶつくさ言いながらもポケットを探り、五百円玉を二枚取り出した。
　おれはそれを受け取ると、自分の財布からテレホンカードを抜いた。言うまでもなく、使用済みカードの度数を書き換えた、変造カードだ。
「こういったパーキングメーターってのは、超音波センサーで車の有無を確認してるんだよね。ほら、この二つある穴が、そう」
　おれはメーターボックスの下のほうにある、二つの丸い窓の上に、五百円玉をあてがった。ちょうどそれで、すっぽりと隠れるほどの大きさなのだ。
「そして、この真ん中にあるのが赤外線のセンサーだ。こっちはメーター近くを見張るやつで、ほら、誰かがこの前を横切っただけでメーターが作動したんじゃたまらないだろ。ところがこれ、安物のセンサーを使ってるタイプだと、うっかり磁気にも反応しちゃうんだな」
　おれは、五百円玉でふさいだ超音波センサーの間にある赤外線センサーの窓前に、テレホンカードを近づけていった。
　ただ近づければいいというものではない。これには、多少のこつとテクニックがいる。磁気とセンサーとの反

射角が問題なのだ。
「センサーの判定時間は約十秒」
ほぼ十秒後に、カチリという音が鳴り、点灯していた料金未納の赤ランプが消えた。
「よし。これで六十分は駐車OKだ。けど、もうだいぶ噂が広まってるんで、センサーの取り替え作業が進んでる。真似をする時には気をつけたほうがいいからね」
おれは呆気にとられている二人に笑って見せた。佐竹などは、小さな目を五百円玉並みに見開いた。
「小僧。おまえ、普段何をやっている」
渉外部長が首を振り、部下を叱りつけるような顔つきになった。まさかおれも、ヤクザから素行をたしなめられるとは思ってもみなかった。
おれはテレホンカードと佐竹の五百円玉をポケットに押し込むと、二人の前を歩き出した。目の前の雑居ビルの三、四階に、ぶち抜きでかかげられた「東建ファイナンス」の看板を指さして言った。
「さあ、お宅の事務所に行きましょうかね」
おれが招待されたのは、四階の中ほどにある一室だった。
佐竹に背中をたたかれ、おれはドアをくぐった。下の三階が表向きの営業所で、こちらのほうが本来の彼らの事務所のようだった。奥の壁には神棚がまつられ、その下には、代紋らしき意匠の染め抜かれた旗が誇らしげに張られていた。
中央に豪華なソファセットが置かれ、そこに、六十代と見える太鼓腹をした人相の悪い男が座り、おれの訪問を待ち受けていた。
腹の突き出た男以外に、一人として舎弟の姿は見えなかった。それがかえって不気味に思える。神棚の左下には金属製のドアが見えた。おそらくは、その奥に控えているのではないだろうか。たぶん、雅人とともに――。
「手塚道郎さんだね。わざわざご足労いただき、痛み入ります」
腹の突き出た男がソファを勧めるように手を差し向け、形だけ非礼を詫びた。ふんぞり返った態度から、こちらのことを鼻くそ程度にも思っていないことがよく分かる。でっぷりとした腹の前で組み合わせた両手の指には、ごつい石のはまった指輪がメリケンサックみたいに並んでいた。
おれは鼻くそ程度の男らしく、車中で飲んだギネスのげっぷを吐きながら、男の向かいに腰かけた。
男の表情が不快げにゆがんだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.